

1	名古屋	相生小学校	オオグチ リョウ
			名前 大口 諒
分科会番号	3	分科会名	社会科教育（小学校）

研究題目 よりよい社会をつくっていかうと、追究し続ける社会科学習

## 研究要項

### 1 研究のねらい

「予測困難な時代になっている」という言葉を書籍やメディア等で目にするようになった。人工知能が判断を行うなど、技術の進歩によって社会や生活が大きく変化している。このような時代の中で起こる課題に対して、大人も子どもも、真剣に考え続けなければならない。予測困難な社会が抱える課題を自分の力で解決するために、よりよい社会を追究し続ける子どもを育てる社会科学習の役割は一層重要になってくると考える。「学習指導要領総則編」では、「このような時代にあって、学校教育には、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協力して課題を解決していく(中略)」と述べられている。ここからも、子どもたちがよりよい社会の在り方を追求し、仲間と協力しながら課題を解決する力を養っていくことの重要性がうかがえる。

本学級の子どもは、学習問題を解決するために、教科書、資料集、タブレット等から必要な情報を探し、記述することができる。一生懸命に記述する姿から、社会科学習に対して前向きに取り組んでいることが分かる。一方で、見通しをもって計画的に追求することまでには至っていない。また、個人で調べることが多く、仲間と協力して調べる姿や、協働的に課題を解決していかうとする姿が見られることは少ないことが現状である。自分たちで困難を乗り越えるためにも、子どもたちには、見通しをもって学習を進める力や仲間と協力しながら課題を解決する力を身に付けてほしいと願っている。

そこで、本研究では、子どもが学習計画を立てて、自ら選んだ方法で調べ学習を行う「個別最適な学び」や仲間や社会で働く人とともに学習を進めていく「協働的な学び」を取り入れる。このように研究を進めることで、「よりよい社会をつくっていかうと、追究し続ける子ども」の育成を目指していきたい。

### 2 研究を進めるにあたって

よりよい社会をつくっていかうと追究し続ける子どもの育成のために以下の3つの手立てを講じて研究を進めていくことにする。

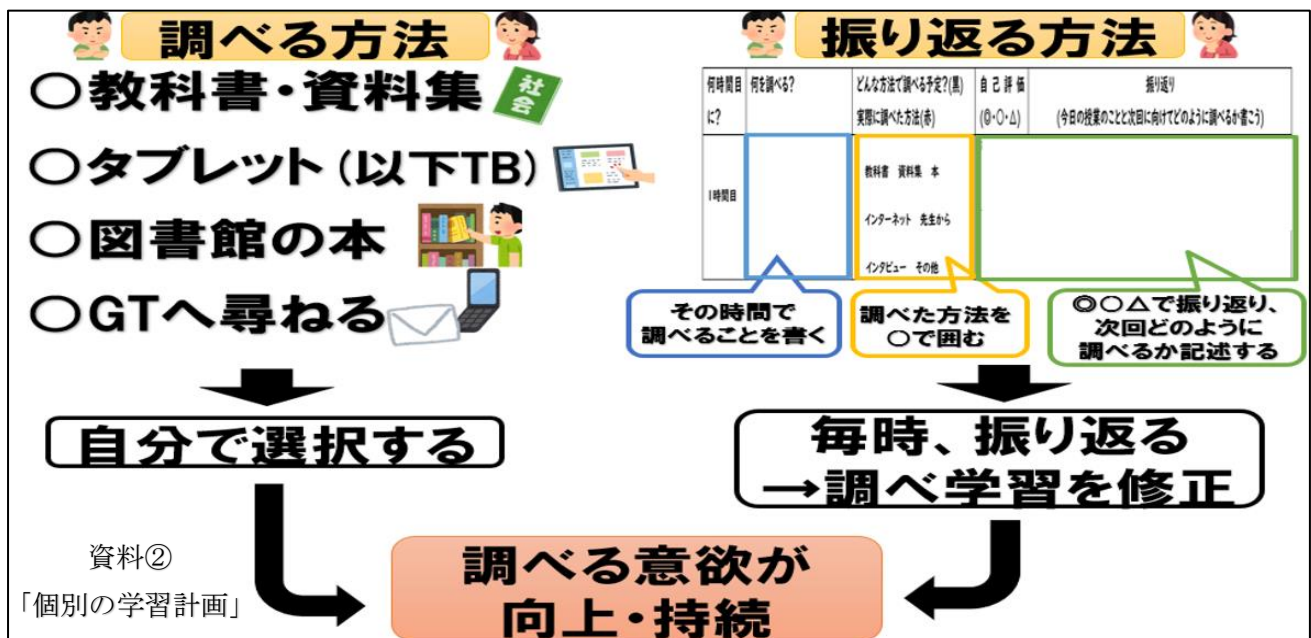
#### 【手立て① 社会で働いている人とともに学習を進める】(協働的な学び)

単元の中で、子どもの「もっと知りたい・調べたい」という気持ちを引き出したい。それが学習を追究するエネルギーの1つになると考える。そのため、実際に社会で働いている人をゲストティーチャー(以下GT)として、子どもが直接話を聞くことができる機会を設ける。この出会いにより、GTの願いや思い、社会が抱える課題などが子どもにとってより身近となり、社会がかかえる問題や課題を解決したいという意欲がもてると考えた。そこで、学期に1回以上、GTと出会う場を設け、年間を通じて様々な社会で働いている人に出会うことができるような年間計画を立てた(次頁資料①)。多様な人と出合わせ、学ぶ機会を設けることで、子どもの調べたいという意欲を高めることができると考えた。特に単元の導入で出会えるようにし、その後、調べ活動やまとめ活動でも出会えるように工夫して研究を進める。

資料① 「年間計画」	単元名	出会う人とねらい
1学期	「米づくりのさかんな地域」	<p>○お米屋さんのNさん →出前授業で子どものお米に対する興味関心を高める。</p> <p>○庄内平野で農家を営むKさん →インターネットでつなぎ、農家さんの工夫や努力を聞く</p>
2学期	<p>「自動車をつくる工業」</p> <p>「情報を生かす産業」</p>	<p>○自動車工場働く方 →工場見学へ行き、学校だけでは分からなかったことを確かめる。</p> <p>○学区のコンビニ店長のさん →見学へ行き、どのような情報を扱っているかインタビューする。</p> <p>○コンビニ本部で働くUさん →店舗と本部のつながりを知る。</p>
3学期	「自然災害を防ぐ」	<p>○自衛隊のMさん →日本の自然災害の現状を知る。</p>

【手立て② PDCA サイクルで見通す個別の学習計画づくり】(個別最適な学び)

子ども自ら選んだ方法で調べ活動を進めるために、調べ学習に入る前に個別の学習計画をつくる(資料②)。「P」では、どのようなことを、どのような手法で調べるか計画を立てる。「D」では、立てた計画を基にして調べ学習を行う。「C」では、調べ学習の振り返りを行う。「A」では、次の学習計画で改善できることを考える。このように子どもが自ら選んだ方法で学習を進めることで子どもは追究し続ける意欲をもつことができる。また、毎時の振り返りを行うことで、自ら学習の進め方の調整を行うことができ、見通しをもち、調べる意欲がさらに向上して学習を進めることができると考えた。



【手立て③ 仲間とともによりよい社会の在り方を提案する】(協働的な学び)

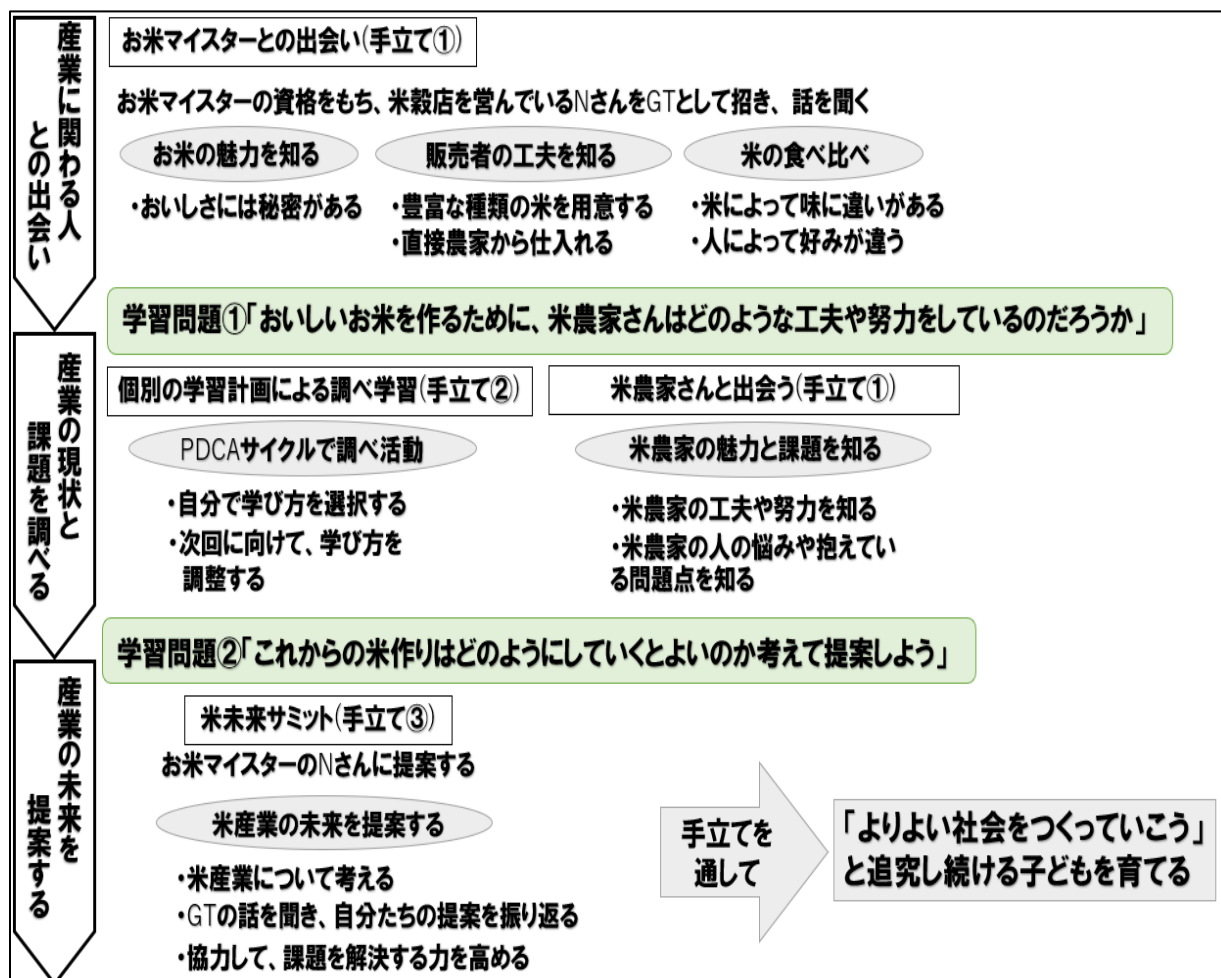
単元の最後に「米未来サミット」を開催する。このサミットは、個人で調べて分かったことを基に、社会が抱える課題の解決方法を仲間と協力して考え、GTに提案する活動である。GTに提案するという目標をもつことで、調べ活動がより活発になることが考えられる。また、GTから提案について話を聞くことで、自分たちの案を振り返ることができ、他者と協力しながら課題を解決する力が高まるのではないかと考えた。

### 3 実践の概要

- (1) 実践単元 「米づくりがさかんな地域」
- (2) 実践の対象 5年生 30名
- (3) 実践のねらい

米作りが盛んな地域は、自然条件・人々の努力や工夫・技術革新などを生かして米作りをしていることを理解する。また、米の生産量の減少・作り手の高齢化など、米産業が抱える課題を学び、どのようにすると解決することができるか考えることができるようにする。

#### (4) 学習過程



### 4 実践の様子

#### 【第1時～第3時】

第1時では、米産業に対する興味を高めるために、名古屋市内で米穀店を営むNさんをGTとして招いて授業を行った。GTは、お米の作られ方や茶碗1杯の米粒の数、品種の数など、子どもが楽しめるクイズ形式で話した(資料③)。その後、Nさんから「お米について伝えてきたけど、米の消費量や米を作る農家さんの数は減っているんだよ」と話があった。すると子どもは「そうなの。」「なんで。」と口々につぶやいた。その後「みんなにもどうしたら解決できるか考えてほしい」とNさんから依頼があった。すると、子どもは「確かに気になる。考えてみたい」と反応を見せた。Nさんとの出会いで、米産業に対する関心や、米産業が抱える課題を解決してみたいという子どもの気持ちの高まりが見られた。



資料③ 「GTが話す様子」

GTからの話だけでなく、味覚からも子どもの米に対する興味を高めたいと考えた。そこで後日、N

さんからいただいたお米と給食のお米の食べ比べ体験を行った。北海道産「ゆめぴりか」、山形県産「つや姫」、愛知県産「あいちのかおり」の3種類を食べ比べた。すると、お米のおいしさや味に違いがあることに気付いた。子どもの振り返りには「お米なんて全部味が一緒だと思っていたけど、それぞれ違ってびっくりした」「こんなにもおいしいのになんで食べる量が減っているのか気になった」などの記述が見られた。子どもの記述から、お米に対する興味関心が高まっていることが見受けられた。

第2時では、「都道府県別米収穫量ランキング、10aあたりの収穫量、食味ランキング特Aの品種数」などの資料から山形県が多くランクインしていることに気付かせた。さらに、Nさんから教えていただいたお米の良さや米産業が抱える課題を想起させることで、疑問を解決したいという気持ちを高めさせた。そこから「おいしいお米をつくるために山形の米農家さんはどのような工夫や努力をしているのだろうか」という学習問題を設定した。

○学習計画と振り返り表		
何時間目に？	何を調べる？	どんな方法？
1時間目	米の作り方	タブレット 農家さんにインタビュー
1時間目	お米がとぎるまでは どれくらい？	教科書 資料集 本 インターネット 先生から インタビュー その他
2時間目	つくるには なにがいる？	教科書 資料集 本 インターネット 先生から インタビュー その他
3時間目	なんでお米が へった？	教科書 資料集 本 インターネット 先生から

資料④「子どもが立てた学習計画」←

第3時では、子どもに学習問題の答えを予想させ、黒板に書かせた。そこから教師と子どもと分類していき、「自然条件」「農家さんの工夫」「農家さん以外の工夫」「米の課題」の4つの調べる視点に絞った。そして、4つの視点を基にして、学習計画表に何時間目に何を調べるのか計画を記述させた(資料④)。子どもの振り返りには、「次の時間から調べることが楽しみです」「気になることが多いから、友達と協力しながらたくさん調べられるようにしたい」などの記述が見られ、調べ活動への意欲が高まっている様子うかがえた。

#### 【第4時～第7時】

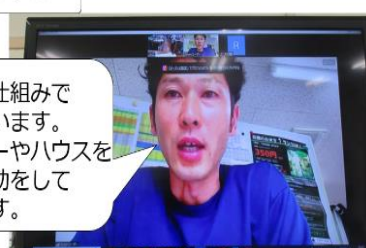
第4時から、自分が立てた学習計画を基にして、調べ学習を行った。調べる方法は、教科書・資料集・学習用タブレットに加え、図書館で借りた本、GTにいつでもメールで質問できる場を用意した。このように環境を整えることで、子ども一人一人に合わせた学習ができると考えた。

毎時間の学習の終わりには、振り返りを行った。「◎・○・△」で自分の学習を振り返り、次時どのように学習したいか記述させた。「1つのことに時間をかけてしまったから、次はたくさんのことを調べたい」「調べたいことがうまく検索できなかったから、誰かに聞いてみたい」など改善に向けた記述があった。一方で、「うまく調べられた」「知りたいことが分かった」などの改善に向けた具体的な記述が見られない子どももいた。そのような子どもには、教師が個別に声を掛けた。すると、まだ調べる必要があることが見付き、次へ調べることにつながることがあった。

第6時には、庄内平野で農家を営むKさんとZOOMでつながり話を伺った(資料⑤)。事前にKさんに質問できることを伝えると、「Kさんに話を聞けるから、調べたことを見直してみよう」「お米を作る以外の農家さんの仕事が調べてもよく分からなかったからKさんに聞いてみたい」と振り返る姿が見られた。当日の話は、動画を使い庄内平野の米作りの様子や、農家のやりがい、工夫、苦労などを聞くことができた。質問する時間では、調べたが分からなかったことや、教科書には載っていない専門的な

米作りをしている時に、どんな人に支えられていますか？

【Kさんへの質問の様子】



国・県・市町村の仕組みでサポートを受けています。例えば、トラクターやハウスを買う時に何割か補助してもらっています。

資料⑤「農家さんから話を聞く様子」

ことを聞く子どももおり、知りたいことがどんどん分かっていき満足した表情だった。

振り返りでは、「庄内平野の農家さんのKさんに話を聞いて、農家さんの工夫や努力について分かった。Nさんも言っていたけどKさんもお米作りには課題があると言っていたから本当に農家さんが減っていたり、お米を食べる量が減ったりしていることが起きていんだと改めた分かった。次回から課題の解決について考えてみたい。」と記述が見られ課題を解決したいという思いが高まっていた。

#### 【第8時～第11時】

個別の調べ学習の後、自分が調べたことを基に学級全体で交流して、庄内平野の米産業に対する理解を深めた。その後、単元の導入で出会ったNさんの「どうしたら解決できるかみんなに考えてほしい」という言葉を想起させ、Nさんにどのようなことを提案するか考えた。話し合いの結果「もっと農家さんの頑張りやお米のよさをアピールする」という結論に至った。すると、ある子どもが「農家さんの頑張りはNさんだけでなく、もっと色々な人に提案するといいと思う」と発言があった。その発言に学級全員が納得した。Nさんのだけでなく、他には誰に伝えるとよいのか考えた。「他学年の人・Nさんのお店のお客さん・自分たちの家の人」などの意見が出た。これらを実現するためにはどうするとよいか考えた。その結果、学校の掲示コーナーにチラシを掲示の許可を校長先生に聞く、Nさんのお店にまとめたものを置いてよいか聞くなどの考えが出た。まとめたものができた後で、実際にお願ひしてみることにした。

第9時には、クラスで3、4人のグループを作り、アピールするための提案方法を考えて、まとめる活動を行った。あるグループでは「ゲームにすると低学年の子も分かると思うから、スクラッチ(プログラミングソフト)で作ってみる」「チラシにしてたくさんの方の目に付くようにしたい」「ニュース風動画にして、朝会で流したい」など様々な意見が出た。自分たちで提案方法を選択して、活動を行った(資料⑥)。自分たちの思いをどのような形でまとめると一番伝わりやすいか、班で活発に話し合う姿が見られた。中にはグループの中で、文章を考えること人、イラストを描く人など役割を分担して協力的に活動を進める姿が見られた。



完成した物を、校長先生やNさんに見せ、校内に貼ったり、お店に置いたりしていいか依頼した。すると全校児童がよく通る掲示板に貼ることができたり、Nさんのお店の棚に置いたりすることができるようになった。子どもたちは自分たちの、「お米を救ったり、米産業の現状を伝えたい」という思いが実現し、うれしそうな表情を見せた。第11時には、子どもが作った動画やチラシについて、Nさんから動画でコメントをいただいた。その動画を見た子どもたちは「一生懸命まとめてよかった」「自分たちのまとめたものを見て、お米を食べってくれる人が増えるかな」と期待をもっていた。最後に学習問題の答えをまとめて、単元を終えた。

## 5 実践の成果と課題(○成果 ●課題)

### 【手立て① 社会で働く人とともに学習を始める】

- 単元の様々な段階で繰り返し、実社会で働く人と関わる機会を設けたことで、子どもの興味・関心を高めることができた。またGTの話を書くだけでなく、GTに伝える場面を設けたことで単元の最後まで追究意欲を持続させることができた。

### 【手立て② PDCA サイクルで見通す個別の学習計画づくり】

- 個別の学習計画を立てたことで、調べる内容が明確になり、意欲的に調べ学習に取り組んだ。また、調べる方法を選択できたことで、調べ学習の自由度や意欲が高まった。さらに、学習計画を立て、振り返りを毎時間行うことで、調べ学習の見通しが立ち、子どもが学習を調整して、自分で考えながら学ぶことができた。
- 子どもによって調べ学習の内容に差ができてしまうことがあった。調べる量や質に差が出ることはあるが、思うように調べられない子どもには、教師が声を掛けて調べるためのヒントを示したり、友達と一緒に調べたことを共有する場を設定したりすることで、調べ学習の内容に差がないようにしたい。

### 【手立て③ 仲間とともによりよい社会の在り方を提案する】

- 調べるだけでなく、それをどのように活用するかを自分たちで考えることができた。GTに自分たちの考えを伝える場を設けたことで、子どもがまとめる活動への意味を感じ、まとめる意欲を高めることができた。
- 子ども自身が、どのようにするとより伝わる提案になるか話し合ったことで、多様な表現方法でまとめを行うことができた。自分たちで提案方法を選択し、協働的に活動をしたことで、最後まで主体的に活動することができた。
- 自分たちの提案が校内やMさんのお店に置けることが実現した。このように自分の活動が身近な場所や社会生活に影響を与えるという認識につながった。このような活動を積み重ねていくことで、よりよい社会をつくっていかうとする意欲を高めていきたい。
- 自分で選択をするということに戸惑ってしまい、まとめることに時間がかかってしまう子どももいた。よって、あらかじめまとめる方法をいくつか提示することで、スムーズに活動することができると考える。

## 6 研究のまとめ

本研究では、「よりよい社会をつくっていかうと、追究し続ける子ども」の育成を目指し、実践を行った。子どもは、社会で働く様々な人と出会ったり、実際に社会が抱える課題を解決する提案を仲間と行ったりした。実践を通して、社会が抱える課題を解決したいという気持ちを高めることができた。これは、学習指導要領が求めている「子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協力して課題を解決していく」学習を目指すことができていると考える。

夏休みが明けると、ある子どもが実際にNさんのお店に行ったことをクラスで報告した。行った理由を聞くと「本当にあるのか確認したいのと、お米について自由研究でまとめようと思ったからです」と言った。実践が終わった後も、子どもの中に学び続けたいという追究意欲が高まっていることを確かに感じ取ることができた。

今後も社会で働く人との出会いから社会科の授業を始め、その方の努力やその方がいる産業が抱える課題を知ることで、よりよい社会をつくっていかうと追究し続ける子どもが育つ授業を行っていきたい。